青山同窓会会報

発行所／青山同窓会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL025-266-2131
編集、発行人／上村光司
印刷所／オリオン印刷㈱
〒950 新潟市南出来島1-19-1
TEL025-283-2151
FAX025-283-3804

ごあいさつ

青山同窓会会長 37回 鈴木正二

年に一度の総会の季節となりました。皆様と懐しい顔合わせができることを喜こんでおります。

今年は、より多くの人々が集まれるようにと、新装なったホテル新潟の大宴会場へと会場が変わりました。

実行委員会や、各期幹事の皆さんのご努力で、益々たくさんの人々が集まり、旧交をあたため、楽しい一夕をすごせますよう期待しております。

昭和67年には、母校も創立百周年を迎えることになります。母校の発展に、同窓会としてどんなお手伝いができるかこれからいろいろと計画されることと思います。どうか同窓会会員各位の一層のご協力、ご支援をお願いする次第であります。

最後に、会員各位の益々のご発展とご健康をお祈りしてごあいさつといたします。

ごあいさつ

東京青山同窓会 会長 44回 斎藤伸雄

昨年11月、東京青山同窓会総会で、前南学会長の後任として会長に選任されました。

母校出身者の発展に些かの貢献をなしうればと念願致しております。

近年は総会の他に新人歓迎会の創設や職業別名簿の刊行など、当同窓会も徐々にその体を整えつつありますが、昭和63年におきましては以下のことを計画しております。

一、文化祭の開催。有名人（出来うれば青山出身者）を招いて講演会を開き、同門の芸術家による美術展を併せて催し、方々、盃を高らかに掲げて交換をする。

一、就職相談。学窓を巣立つ諸君のため、広く一線にて活躍中の諸先輩と連絡をとりながら、意に叶う第二の人生が開けるよう極力取り計らう。

一、業務連絡の場。母校出身者の社会的活動は眼を見張るものがあり、相互の交流を深めるならば、必ずや共存共栄の途が開かれるものと思われるが、その結び目としての役割を果たす。

一、中断中の会報復活。青山健児の消息を可能な限り収録し、母校意識の高揚に資する。当面年二回を目標とする。

従来不安でありました事務局も御奉仕の申し出があり、好個の所在地を得て安定致しました。何なりとご連絡賜わらば幸甚に存じます。

以上、青山同窓会の繁栄を念じつつ、挨拶とさせていただきます。

新人歓迎会開かる

東京青山同窓会

去る5月23日、経済倶楽部（日本橋東洋経済ビル内）で恒例の新人歓迎会が開かれました。

斎藤伸雄東京同窓会会長はじめ、高岡富栄幹事長ほか錚錚たる同窓会員先輩が40名ほどの新人を迎えてくださいました。新潟高校からは、昨年度三年担任の広野先生と山中先生が出席しました。

会場は総勢約120名で埋まり、会長、幹事長の挨拶について、87回卒業の清水忠明氏（東京大学工学部大学院博士課程）の「東京生活術」—副題（化学エネルギー工学）についての格調の高い講演、35回卒業の中村信一氏（牧師・文人画家）の熱誠溢れる芸術論・宗教論を交えた激励に新人たちは深い感銘を受けていました。

閉会後の二次会は、「茜」（74回卒業上田久則氏経営）で若手の先輩との交流で時間を忘れて盛上がっていました。

母校創立100周年に向けて

校内教育委員会 上杉雅之

本校は四年後の昭和67年7月1日、創立一〇〇周年を迎える。大きな節目である。当然それにふさわしい記念事業や行事が企画され、実行に移されることになろう。

現在、母校では次の二点に関して準備作業に入る前の案づくりが進められており、いずれは青山同窓会、PTA、学校三者で結成されることになる一〇〇周年記念事業準備委員会に提出されることになろう。

今回はその一部をご紹介し、昭和67年に向けて同窓各位の積極的なご協力をお願い申し上げる次第です。

一、新潟高校の21世紀に向けての施設設備の構想

昭和31年、県下にさきがけて鉄筋コンクリート造りの白亜の殿堂がその威容を現わした時、時代を先取りした設計と機能性は多くの注目を集め、生徒は自分の学び舎に大きな誇りと愛着を持って学業に励むことができた。

爾来30有余年、生徒数の増加は予想を越えて、校舎の狭溢化は進み、新潟地震と構造上の疲労から、現在では伝統を誇るのみの老朽校舎となっている。そこで、再び、21世紀への展望のもと、新時代に生きる人材の育成にふさわしいゆとりのある校舎の蘇生を期して、現在構想を練っております。

一部その具体的内容を項目別にあげてみる。

一、殆んどの生徒が大学進学を目指しているので、コンピューター、視聴覚機材を駆使して高度情報化社会に対応した学習指導のできる数多くのスペースを設ける。

一、心豊かな人間性をはぐくむ教育が求められるので、学校施設は明るく自由な雰囲気を備えるよう、また数多く

（次頁5段目につづく）

小平邦彦教授の講演会開かる

去る六月二日午後、母校で小平邦彦教授（東京大学名誉教授）の講演会が行われました。先生は数学におけるノーベル賞ともいうべきフィールズ賞(54年)、文化勲賞(57年)等々、数々の賞に輝く世界的な数学者です。講演では、ご自身がどういうふうに数学者になられたか、また研究される時のご様子、他の天才達の例をあげて発見がどのようになされるか、その不可思議さについても触れられました。母校の後輩たちも、偉大な数学者である小平先生の学問の美しさ、人間の美しさに感銘を受け、真剣に耳を傾けました。

小平先生は、このたび初めて高校生を対象にして講演されましたが、これが実現されたのも本校卒業の志賀浩二教授（東京工業大学名誉教授、〈57回卒〉）の多大なご尽力の賜でありました。志賀先生も同じ数学の道を歩まれ、講演会に先立ち、後輩の前で小平先生のご紹介をいただきました。小平先生への限りない敬愛の念と母校の後輩に寄せる熱き思いが滲み出ていました。以下、講演会を前にして、志賀先生が小平先生について本校生徒にあてて書かれたメッセージです。

小平先生のこと

東京工業大学名誉教授
57回　志賀浩二

この度、6月2日に、私が敬愛してやまない日本数学界の最高峰におられる小平邦彦先生を、新潟高校にお招きして、皆さんの前でお話して頂くことになりました。

私は、昭和24年第57回の卒業で旧制新潟中学で学びました。私たちの学年が、旧制中学校の最後の時期に当っています。もう40年も前のことです。

私は中学三年の頃から、数学を勉強することが好きになってきましたが、しばらくして小平先生のお噂がどこからともなく伝わってくるようになりました。「ものすごくできる先生がおられる。いまは東大からプリンストン大学へ渡られたが、東大の数学科を御卒業後、物理学科へ再入学され、そこで助教授になられた。何しろ小平先生の試験問題の難かしいのは有名で、俊秀を集めた東大の物理の連中がなかなか解けない。試験監督をしておられる小平先生は、皆が四苦八苦しているのを見て困ってしまわれて、窓ごしに安田講堂の時計の方を見ながら、『白紙では困ります。何か書いて下さいよ。』といっておられた。」などという他愛もない話が伝わってきました。こんな話でも私の心は動いて、小平先生とはどんな先生だろう、近づき難いけれども、一度お顔だけでも見たいものだ、とそのようなことを思っておりました。青年時代の私には、霧に包まれた数学の高峰と、小平先生の像が重なるようでした。

戦争中、小平先生のなされたお仕事が、戦後直ちに、当時、世界数学の指導的地位にあったワイル教授の目にとまり、プリンストン高級科学の研究所へ招かれたのでした。そして一九四九年、朝永振一郎先生と御一緒に、太平洋を渡られたのでした。

プリンストンの高級科学研究所にはアインシュタインをはじめ、世界各国から最高の学者が集まっておりました。小平先生のお仕事は、ここで短時日に大きく開花し、日本の至宝から、世界の小平としての、20世紀数学の最高峰に立たれるようになりました。

数学に少し関心のある方ならば、ガウスやアーベルという数学者の名前を聞いたことがあるかもしれません。この人たちは、19世紀数学史上に燦然と輝く数学者です。同じように、小平先生のお名前は20世紀数学史上にいつまでも深く刻みこまれることでしょう。

小平先生のお仕事は、天上はるかな、隠された星の光りを見出すようなものであると評されたような、深く透き徹った数学の本質をつくものでした。小平先生のお仕事は多岐にわたりますが、その中心は、現在『小平幾何』とよばれて知られている、代数幾何の大きな理論を創り上げたことです。

小平先生は、一九五四年の世界数学者会議において、四年間に二人にしか与えられない、数学のノーベル賞に相当する、フィールズ賞を受賞されました。一九五七年には文化勲章を、また一九八五年には世界最高の数学者に与えら

（次頁1段へつづく）

（前頁よりつづく）

の談話室等を設ける。多目的教室も増やす。

一、音楽会、観劇会、講演会のための講堂を設置し、地域の社会教育との連携をも図る。

一、国際化時代にふさわしく、外国からの留学生、また帰国子女を受けるべく多目的学習メディアを備えた施設設備を設ける。

一、「文武両道」の校風を持つ新潟高校に学ぶ生徒のためのクラブ合宿所、トレーニングセンター等を体育館に付設する。

二、百年史の出版

明治、大正、昭和の三代にわたって脈々と流れ続けている青山精神を言葉を通してまとめあげ、うたいあげることはむづかしい。現在考えられている構想は次の如くである。

一、資料編一冊—700頁程度

一、通史編一冊。前半—通史（含写真）全日制—500頁程度、通信制—100頁程度。後半—回顧録　年表—100頁程度、座談会

ご存知のとおり本校は度々の火災で多くの資料を失ってきたが、特に昭和29年の火災では、ほぼ全面的といってよいほど資料を焼失したのである。その後同窓各位のご寄贈によりすこしずつ資料を増してきてはいるが、充実というにはほど遠い現状であり、広く同窓会各位のご協力を得なければ百周年記念誌はまともな形での出版は望めない。切にご協力を再度お願い申し上げます。

（2面よりつづく）

れるウルフ賞も受賞されました。

小平先生の数学は、一言でいえば、美しい数学なのです。学問の中にある美しさは、絵や音楽のように、皆さんがすぐにわかるというわけにはいかないかもしれません。花が美しく咲くには、花芽ができ、蕾が育ち、季節の到来をまつという経過を辿りますが、同じように、学問の世界でも美しい花を開かせるには時間がいります。その時は、小平先生、その人の中に育まれているでしょう。私は先生とお話するとき、いつも、小平先生のお話に中から学問の美しさがにじみ出ていると感じています。

皆さんも、きっと小平先生のお話の中から何かを感じとられるでしょう。そしてその調べは、これからの人生の中で、時折り思い起こす調べになるのではないかと思っています。

浩二先生とおべんとう

事務局　岩田

この度志賀浩二先生をお迎えして、幾十年か前の日が懐しく昨日のことのようにはっきりと思い出されます。おだやかな笑顔、温かなお人柄、それに磨かれた年輪が加わって、いま立派な数学者として母校を訪れて下さいました。

今日、この日を、お母さんがどんなにかお喜びになられたことでございましょう。私も共にお喜び申しあげます。

戦後間もない頃、古町六番町の万松堂の二階に、青山同窓会の青山倶楽部がありました。そこに溢れるばかりの気品と美しさ、豊かな教養をおもちの方がおられました。その方が志賀哲夫先生、浩二先生のお母さんです。縁あって私も一緒に勤めさせて頂きました。当時長男の哲夫さんは東大へ、浩二さんは新大理学部の学生さんでした。（お二人ともお名前のままで呼ばせて頂きます）

薄暗い階段に靴音がして、おだやかな顔ににっこりと笑みを浮かべた浩二さんがおべんとうを持って来ます。あたたかなおべんとうをお母さんの為に自分で作って届けて下さるのです。炊きたてのご飯の上には黒ごまをふりかけて、浩二さんの優しい心根がうかがわれます。私はほのぼのとした親子の情愛を感じさせられました。

その頃青山倶楽部へおいでになる大学の先生方が、お母さんに対して「志賀さん、あなたは何にもまさる宝をお持ちですね。将来がお楽しみですね」と、皆様口を揃えてこのようにおっしゃいました。

お母さんの為にあたたかなおべんとうを作って下さった人、学問とは、数学とは、このような温かな人間性の中から生れるものなのでしょうか。

何十年か前の若木は、いま美しい花を見せてくれました。遠い昔を想い起して、私までがしみじみとした幸せを味わっております。

浩二さん、益々のご健闘をお祈り致します。

地震と空襲

旧職員　阿部　正

私は本校に在職中、新潟地震だけでなく名古屋で地震に会い、二回地震に会った。

当時、学校は新潟中学校といった時代で、戦争も激しくなり、資源と労働力に不足を来すようになり、昭和十九年八月に本校先徒のうち4・5年生が名古屋の愛知航空という会社に勤労動員に行った。寮は最初宝神寮であったが、その後、新しく建てられた昭和寮に移った。

宝神寮と昭和寮の間は電車に乗らねばならず、相当離れているが、何れも名古屋では港湾地区にあり、埋立地の軟弱地盤の上に建てられたものであった。昭和寮は三棟あり二階建で、その一棟に本校生徒が入った。

会社は愛知時計という有名な柱時計製造の会社から航空機製造の会社となったもので、海軍の新鋭機「瑞雲」を作っていた。飛行機の設計から組立てまでやった大きな会社で敵機の目標となったのは当然である。

昭和十九年十二月七日「明日は大詔奉戴日敵機約百機名古屋を空襲する」という情報が入り、当日会社では飛行機を安全地帯に移動したりする作業であった。十二月八日というのは昭和十六年十二月八日米国に対して宣戦布告をした日である。

私は当日は寮の日直で教官室で仕事をしていた。入口の近くの八畳の部屋は机が一つあるだけの、寝室も兼ねていた。

新潟では雪もちらつく寒い季節であるが、名古屋では雲一つないポカポカするよい日だった。午後一時頃、突然窓ガラスがガタガタと鳴り、棚の書類や砂の入った素焼の防火弾が上から落ちてくる。建物がユッサユッサと揺れてくる。とっさに窓から飛び降り、走り出したが、ゆれがひどく立っていることができない程であった。

途中、直径2メートル位の防火用水の水が飛び散っているところ、その先には便所のための水分が一帯にあふれ出しているところを、はだしで安全地帯に逃げ出した。

そこには、寮に病気等で残っていた生徒も避難していたが、うろたえている生徒もいたので大声で呼びよせた。その間、余震がひどく建物に近づくことはとても出来なかった。

そうこうしているうちに、また一つ大きなユレがグラッと来た。この時に隣の寮は砂煙りをあげて倒壊してしまった。何百人と入っていた細長い大きな建物が、それこそ一瞬の間に全壊してしまった時のすごさは、今でも脳裏に焼きついている。一番向うの寮は、くの字型に曲ってしまった。

ふと空を見あげると、B29十数機が、はるか上空を悠々と飛び去って行くのが、青空の中に透き通るように見えた。

工場の方も被害甚大であったことはもちろんである。本隊が会社を引きあげてきたのは、ずっと後のことである。相談の結果、寮が傾いているので2階の人数を下に廻し退避時の注意をして寝についた。

そうすると草木もねむるウシミツ時に、グラッと余震が来た。それもひどい余震だ。無意識のうちに鄰室に飛び出し外に飛び降りた。次の日も、また次の日も不思議なことにきまった真夜中にグラッとやってくる。小さいものではない、相当のヤツがくるので、油断はできなかった。逃げ出す時に私の腰にぶら下った先生も居り、逃げるのに一苦労した時もあった。電気もない水道、風呂もない生活が何日間も続いた。

ようやく地震も落付いてきたので生徒を2階にもどした。ところが、その晩ぐっすりと眠っている時にまたグラッとやってきた。今迄の癖が出て1階だと感違いをして、2階から飛び降りてしまった生徒も多く始末であった。

市街地の方も地盤の軟弱地帯では家屋が軒なみやられ、地震のひどさを物語っていた。私は新潟地震もひどかったが、名古屋の方もひどい目にあっているので、今でも思い出の一つになっている。

この地震について新聞報道はというと、新潟日報はほんの二、三行で、朝日新聞は下段の方で「昨日の地震は遠州灘」の見出しで、わずか浜松方面を取扱い、名古屋地方は最下段で二十行足らずであった。内容は「七日の地震は意外な強震であったが、一部に倒半壊の建物と死傷者を出したのみでたいした被害もなく……」という具合に、事実とは大きく異なる記事で終っている。これもみな統制下にあった記事である。

最後に理科年表により、新潟地震と名古屋の地震（正式には東南海地震）とを表にまとめてみた。御参考までに。

新潟・名古屋の地震の比較
（理科年表による）

新潟地震 38.4°N139.2°E	東南海地震 33.7°N136.2°E	震源地
S.39.6.16 (1964)	S.19.12.7 (1944)	年月日
7.5	8.0	M
新潟・秋田・山形	静岡・愛知・三重・岐阜・奈良・滋賀・特に名古屋重工業地域	被害地域
26	998	死者
1,960	26,130	住家全壊
6,640	46,950	半壊
15,297 浸水	3,059 流失	その他

微細藻類について

45回　児玉邦彦

6月18日附中日新聞夕刊に『魔法の緑藻』でバイオ石油。2キロの塊から「原油」1キロ（明大グループ培養技術開発）という大見出しで次の如く載っていた。植物プランクトンの一種で石油を造り出す緑藻を大量培養し、効率良くガソリンを抽出するバイオテクノロジーシステムを明治大農学部岩本浩明教授の研究グループがこのほど開発した。海外でもフランス、ベルギーなどで手掛けられているが、戸外での大量培養技術が確立されたのは初めて。コスト面で安い原油には現在のところ太刀打ち出来ないものの、既に国連食糧農業機関（FAO）が緑藻そのものを簡易燃料として使う事に注目、日本の技術協力により、アフリカの塩水湖で実用化したいとの打診が来ているという云々。

このバイオ石油をつくる緑藻はボツリオコツカスブラウニーと呼ばれる単細胞類で数個から数百個の集合体を形成し、湖水面に浮遊している。集合体の大きいもので直径0・5ミリ。時に異常発生し湖水を暗緑色に変える。石油の炭化水素は、炭素が6～8個つながったものが主だが、ボツリオコツカスのつくる炭化水素は32～34個も長くつながっている、と説明してあった。

概ね私共が常々岩本教授から教えて戴いていた研究内容であると拝見した。というのは、岩本教授は私共総業山富株式会社が総販社として売り出している「クロスタニン」のメーカー日健総本社の筆頭顧問として田中美穂社長と共に特許食品クロスタニンの開発者なのである。つまり、特許複合食品クロスタニンの核となっているNβ1・3グルカン（多糖体）の特殊原料クロレラ光合成ピレノイドーサイワモト株の開発者その人に他ならない。岩本教授と日健田中社長を中心とする微細藻類の開発は、これからも多岐にわたるであろう。今春発売した機能食品ドナリエラについて、いえばアメリカ・オーストラリア産のそれに比べ遥かにβカロチン含有度の高い、イスラエルエラート地方産のそれの世界独占販売権を確保されたのも、お二人の御協力の強さとワイズマン研究所（イスラエル最高）との人間関係の深さによるものである。βカロチンが癌の予防に卓効があるという事は疫学的に殆ど常識となっている。

岩本教授を研究スタッフ主軸とする微細藻類開発はまだまだ続く。例えばイワシ・サバ、サンマ等の所謂青ざかな類の油の中に含まれるEPA（エイコサペンタエン酸）は血液の凝固を抑制するプロスタグランジンの前駆物質として作用し、このEPAを驚異的に多量に含有したものに淡水産微細藻類「モノダス」があるという事も突きとめられて居り、いずれ商品化される見通しである。田中日健総本社長、岩本博士の御協力は今後ますますこれらミクロの世界の開発を進められるであろう。世界の一方で宇宙開発がややもすれば軍事面に片寄り、進められて行くに比して、微生物等の研究開発は徹底した平和利用に向かうだろうというのは私の希望的観測、夢物語りであろうか。旧制県立新潟中学時代に化学等丸暗記による理系学科に落第点ばかりとっていた私のこれは全くの偏見であるかも知れないが、あえて云わせて貰うならば、それ程自分の商品とメーカーに惚れなければ商売なぞ馬鹿馬鹿しくやって居られない。人の造れぬものを造る能力がある人を、そう云う能力皆無の私は無条件に尊敬し、極言すれば商人と実業家の違いがそこにあるとまで云い度い。これは前述の如くにあくまでも私の極論極言である。山富商事の前身山田富五郎商店の創始者初代富五郎はその様な人であったと、当時を知る人から聞いている。因みに新潟にも微細藻類事業に着手された人新中第40回安悟大佑氏が、又それを引き継いで第43回加賀田達二氏が居られ、その微細藻類商品名はスピルリナ、会社名は日本スピルリナ株式会社であると云い添えて置きたい。

総会に先行して慰霊祭と一冊の同期会誌を発行

46回　井上三郎

私が幹事を引き受けて13年経った。チフスで入学一年おくれで兄弟上原誠、田宮篤と交る。新高逡巡。早大専法入りも一年おくれ。応召三回等で沢山の交友を得た事を喜ぶ。父の無産運動が今でも交際上誤解を受けるが気にしない。

常に友恋し、人慕わしである。私は謄写器4ケを駆使、同期会の会計報告、友の消息に努めた。同窓会の出席数が多くなった。小沢太郎君の提案を容れて地元、東京方面交流策で六日町等で同期会を開いた。東京人に甘えてばかり居ず、法務省や早大等や学校関係で知った安い交通の便のよいところを思い出して設営集会場も作った。鹿楼、占い酒場、ジロー、エース、等々である。会計は同期会がほとんど定着化した小林礼四郎君で鷹揚の同君の「勉強」や云い悪いが身銭を切って次回がうまく、通信費が節減するため6万5千円は残すことが続いた。友恋し、人慕わしの故である。竹林君等々、好きでやっているからの声が、声なき声が……。私の謄写器では及ばなくなった。同期生の会社等のワープロ、コピーに甘えるようになった。小林君が具合悪くなったので会計を頼み助かった。所が同君も倒れた時には参った。女池の葬儀の奥の新潟貯金事務センターに行き、業務課の田中博信氏に交渉して払込通知書の発行をして頂いた。田中ホテルの会場設営、私書箱設置等々。

創立90周年で又奮い立った。会誌を作ろうと話し合った。事務局も我が家に設けた。万才、五十年の回顧が生まれた。

（ここでぐっと省略）

そして五十五年の回顧が2冊も出来た。1冊は編集委員会を片桐君のところに設けて。

最後に私の失敗を述べてお詫びする。案内を発行先の近くの親戚の北方博物館の観光バスできた婦人が2人、私を「先生」と呼びかけ新潟で発送すれば早く着くと申し出たことに甚えたのだ。私自身が出したのでも辛うじてが多かった。深くお詫びします。

なお、これから法務省のOB会で上京するので、これも省略しますが私の立替分は請求したのではありません。昨年暮に各位からの通信や投稿等をそっくりコピーして発送を片桐君方を通じて会報等に代えてもらう依頼が発展的解消して第1冊が編集され、そして第2冊が先に出来上ったのでした。そこで一緒に送って頂いたのです。会計報告をつける都合で編集委員会から申し入れがあったからです。皆さんにご迷惑をおかけしましたがお許し下さい。

ご要望、通信、投稿を私方事務局にお送り下さい。

12日には新潟の調停委員のOB会があり、11日は戻って参ります。6月5日の総会慰霊祭後早くも、小島、広瀬、片桐、佐野、斉藤、牧野の会員や鈴木、伊佐のご遺族等が度々訪ねられましたし、前川さんとも電話を交し合ったりしております。大事なことを人に頼むは絶対悪いことを74才になってつくづく痛感しました。重ねてお詫び申し上げます。

〝留学への道〟

（一九八六～一九八七ロータリー財団奨学生）
新潟大学大学院法学研究科
88回 沢 登 文 治

私は一九八六年から一九八七年までの約一年間、ロータリー財団奨学生として、カリフォルニア州立大学サクラメント校で生活する機会を得ました。

私は高校に入学したころにはただ漠然とではあったものの、アメリカ合衆国に近い将来渡ってみたいと考え初めていたので、高校生の交換留学制度の一つであるAFSの試験にチャレンジしました。結果はだめ。しかしその後も、よく見たアメリカ映画の影響の為か私の渡米熱はさめることはありませんでした。ところが学年が進むにつれ幸か不幸か、私も例にもれず、大学受験の波に巻きこまれていき漠然たるアメリカ渡航の夢は受験という超現実問題の前にその影を潜めたようでした。

一九八〇年四月、どうにか無事新潟大学法学部に入学し新しい生活が始まりました。

アメリカを訪れたいという高校時代の願望は、目前に迫る現実的問題の消失とともに再びわきあがりましたが、新潟という田舎ではどのようにすればアメリカの大学に入学できるかという、現実的方法を知る手段もなく時間ばかりが過ぎました。こうして又、他の多くの学生の例にもれず、私の最初の海外旅行は大学卒業前の約一カ月間の卒業旅行でした。この旅行で私はカリフォルニア州各地、テキサス州、ノースカロライナ州、首都ワシントンそしてカナダのバンクーバー等を大ていの場合一人で見て歩きました。その時に初めて高校のときに抱いていた漠然たるアメリカが現実に自分のものとなった気がしました。その何と広大でエネルギッシュなことか、これだけの大国相手によく日本は戦いを挑んだものだ、これが最初にアメリカが私に与えたインパクトでした。

一旦この旅行でアメリカが現実的となったら、今度は、ただ旅行して各地を見るだけではなく、一年程そこに生活したいという想いが現実のものとして私の頭に焼きつきました。しかし、大学卒業と同時に就職し、一旦は現実となったはずのアメリカが毎日の職場勤務という現実生活の前に再び遠のきはじめたのです。

それでも私は望みを捨てませんでした。私の職場が保守的な日本の国に於ても一番保守的で、新しい考え方や新しい方式を嫌うところで、しかも自分の将来の姿がほぼ手にとってわかるような状態であったこと、又、海外との交渉もまず無いことなどが手伝って、自分にしかできないことのできるところ、少くとも自分の意志が表現できるところを探し求めるようになりました。自分の意志が表現できるところを探し求めていた私に巡ってきたチャンスが大学院法学研究科での大学院生としての生活であり、又、大学院に入る前にチャレンジしたロータリー財団奨学生としてのカリフォルニア州立大学サクラメント校における留学生活でした。一口にこのように言うと多くの人達は「うまいことやったな」と思われるかも知れませんが、大学院へ入る為の準備（願書提出、指導教官との面接や面接試験）ロータリー財団奨学生のための準備（願書提出、推薦書提出、TOEFL受験など）等すべて大学院へ入る以前に社会人として仕事をしながら行わなければならなかったのですから、そんなに楽なものではありませんでした。

こうして、大学卒業前のアメリカ旅行の時に持ったカリフォルニア州での大学生活の夢がようやく一九八六年八月に実現しました。大学院の方は、入学してほんの数カ月後の渡米であったにもかかわらず、教授達の取り計らいによって休学ではなく、正規の留学扱いということになりました。

それでは実際にカリフォルニア州立大学の授業はどのように行なわれるものなのか、簡単に触れておきましょう。

私のいたカリフォルニア州立大学サクラメント校は一年が二期に分かれていました。一つの学期が始まる前に各コースの内容を紹介するクラススケジュールが売られるのでそれをもとに、どのコースを自分が受講するのかを決め、コンピューター用カードに記入して、決められた日時までに提出することからすべての手続きは始まります。一つのコースはたいてい三単位、つまり週三時間分（一クラス五十分であれば週三回、一時間十五分なら週二回、二時間五十分なら週一回）の講義があります。最低でも十二単位に四つのコース登録されていなければなりません。

一つのコースにパスするには普通三つ以上の中間試験と一つの期末試験、その他ぬきうちのテストが何回かあります。例えば四つのコースを受けているとすれば、最低でも十六の中間・期末試験があることになります。そしていくつかの中間試験等で思わしくない成績をとると、プロベイション（一定期間内に成績をある程度のレベルにまであげないと停学・退学）にかけられるから大変です。アメリカの大学で生き残ろうとすればアメリカ人と同様に英語を使いこなせなければならないのは当然のこと、アメリカ人の学生の何倍も勉強しなければなりません。しかし、自分の力を試したい人、自ら苦労を買ってでようという人には絶好の場です。

私がここで述べたかったことは、どのようなものであれ自分の持っている将来の希望、計画を、その時の否定的な状況や周囲の反対のために簡単に捨てたりせずに、自分の心にしっかりと抱いていれば、きっとそのうちそれが実現するときが来るということです。ただしその間も忍耐強く努力することは必要です。これからもお互い充実した人生を歩むために頑張りましょう。

大学入試

63年春の結果は満足すべきものではなかった。国公立大受験機会複数化の二年目で、やはり関西、九州勢の東日本流入が続き、本校生は東北大での後退、関東勢の流入で新潟大各学部、特に医学部での不振とダブルパンチを喰らった。

金沢大、東京学芸大と中堅上位層が他に攻め入ったが全般的には無念の涙をのんだ者の多い学年であった。

来年度入試での雪辱が強く望まれる。

（本校進路指導部）

63年度 主な大学合格者数 （旧卒者も含む）

〈国公立大〉		〈私立大〉	
新潟	131	早稲田	25
長岡技術科学	3	慶応義塾	23
北海道	8	中央	26
東北	32	明治	21
山形	8	立教	16
千葉	3	法政	7
東京	7	上智	10
東京学芸	14	日本	10
東京工業	5	青山学院	34
東京外語	4	東京理科	20
一橋	5	専修	6
横浜国立	12	聖心女子	3
金沢	28	駒沢	7
信州	9	明治学院	3
群馬	5	学習院	3
埼玉	8	日本女子	8
筑波	6	津田塾	7
名古屋	2	独協	3
京都	14	神奈川	2
奈良女子	5	東海	3
横浜市立	4	同志社	5
都立科学技術	2	立命館	10
その他・合計	370	その他・合計	336

35回生

卒業六十周年記念会

三十五期生は昭和三年三月卒業して、今年で六十年となるので記念の会を六月十一日新潟市「小甚」で行ないました。同期生であった故小山久一氏の大きな遺影の飾ざられた一階大広間に集る者二十名。内東京からの参加者四名。六十年ともなると身体の不調を訴える人が多く二十名の参加は成功であったと思わなければならない。

他界された人々の冥福を祈る黙禱に始まり、自己紹介に移る。六十年の人生を語るのに夫々に長広舌となり時間は過ぎていった。対談の時間が少くなって物足りなかったが一〇五歳説を語るなど皆元気充実して年令を思わせない健在振りであった。数は少くとも今後この会を続けて行けそうな頼しさを感じた。

出席者

入沢健三、今成一郎、飯村豊雄、内田善衛、尾崎三夫、倉田貞三、近藤百之、後藤一夫、佐藤嘉市、沢山巌、渋谷門衛、須藤良明、相馬雄三、高橋松二、武田慎三郎、寺田利男、中村信一、中山藤吉、古川喜久次、松岡市栄門

卒業四十年記念同期会

〈54・55回〉

我々第五十四・五十五期同期の桜は、新中卒業後四十年を迎えました。同期生一同はそれぞれところを得て各方面で活躍しておりますが、官庁関係をはじめとして、そろそろ停年という人生の一大転換期に突入する年令を迎えました。

そこで、毎年一月五日を定例として同期会を開催している新潟同期会と、同じく七月開催を恒例としている東京同期会とが合同同期会を開くべく半年がかりで計画して、去る六十二年七月十一日に、湯沢ニューオータニホテルで賑賑しく開催しました。

卒業以来初めて会う顔もあったりして懐しい一夕でした。

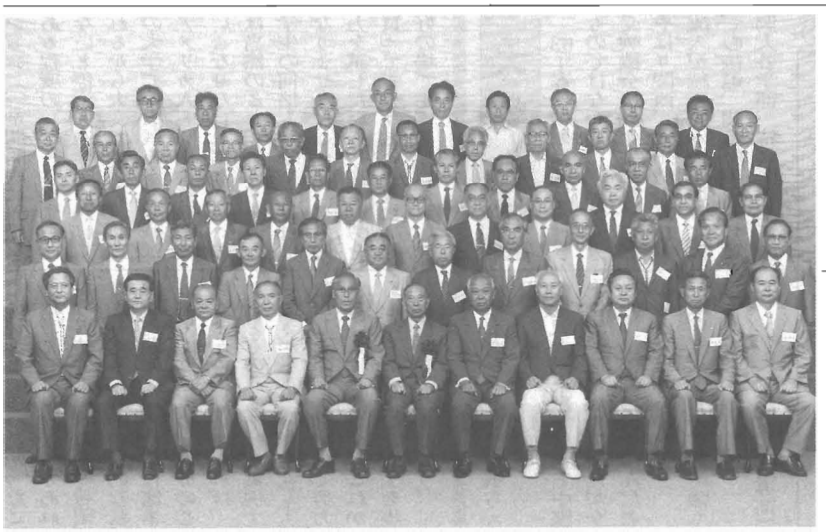
出席者は阿尻威吾、安達信吾、中村幹男、中村正義、沢栗亮一、上杉伸二、新井勝竜、加藤喜一（以上東京組）、高橋克威、片桐武昭、土田達禅、梅沢竹太郎、桑山稔、浅妻昭三、渋木登、長谷川政彦、今湊良敬、保倉修、米山俊彦、常木剛、金子隆弘、松浦徳雄、早福卓の諸君であります。

幹事は東京が安達・中村。新潟は浅妻・保倉・今湊がつとめた。酔う程に昔に若返り停年議論がとびかい、果ては校歌・応援歌の大合唱で一同華々しく満足して討死した次第であります。ナムアミダブツ。

（今湊　記）

五十六期会

新装のホテル新潟で



五十六回卒では、毎年職業グループ別で幹事を立て持ち回りで同期会を行っています。

今回は特に東京で、独自に「いそろく会」と銘打って活発に活動しているメンバーと合同で六月二十五日新装なったホテル新潟で開催。恩師岩野祐吉・藤田久喜両先生、東京いそろく会十三名、新潟五十五名総勢七十名。母校の応援歌、校歌を全員で合唱、久久に若返っての賑やかな会合でした。（幹事・中由　記）

四十八期例会

去る十一月七日古町割烹かき正において、恒例の四十八期会が開催された。

六十路を過ぎてはや数年、体力の衰えは蓋うべくもなく、行く末が何となく見えはじめたとき、人は昔の仲間と会う機会を何よりも大事にするようになる。

今まであまり顔を出さなかった友が、回を追って増えてきて、三十八名と多数の出席を得て盛会であったことは、幹事一同としてこの上ない欣びであった。

毎回痛感するのだが、時間と酒量に限度があることはまことに残念でならない。今年も多数のご出席をお願いする次第である。（大谷 記）

卒業三十五周年
六十一回生岩室に集う

卒業三十五周年記念同期会を去る六月十一日、岩室の綿屋で開催。会場へ行く前に、丁度、青陵祭の前日という事で忙しい母校の青山会館をお借りして、渡辺、池両先生の授業を再現して戴いた。

池先生は今も変らずの名調子、池節で「わたしの人生論」と題してお話をされ、「もう駄めだとおもう向うに道がある」という先生の名文句も引用されての熱弁であった。

渡辺先生も、とくとくとした団長節で、お得意の出し物玄宗・揚貴妃について、現地視察の体験を踏まえて、持ち時間をオーバーしてまでのお話であった。土岐先生もお顔を出され、近況報告を兼ねご挨拶を戴いた。久しぶりの授業に喜びとなつかしさを顔面にうかべ、青山会館を後にした。六時から、先生では只お一人の渡辺先生と、東京から三十名弱、女性全員（八名―我が期は青山で初めて女性の入学があった期である）の参加を得、総勢六十六名の出席のもとで、高橋照君が今日のために集めて持参した寒梅で乾杯、開宴に入った。例によって例の如く、つもる話で時間のたつのも忘れ、岸田君の指揮による校歌、応援歌の大合唱で終宴を迎えたのが何と十時過ぎであった。（実は宿の人からソロ〳〵止めて下さいといわれたのです）翌日は記念ゴルフに参加するもの、帰途につくもの、それぞれ五年後の再会の折を期して惜別した。最後に渡辺先生からの礼状をご披露し、同期会の報告とします。

この度の同級会は愉快でした。よく集まったものだ。童顔に還って談じつつのんだ。みんな立派になって感心。早田

母校ではいま…

○新入生12クラス編成となる。

昨年度新入生11クラス編成に引き続き、今年度は一クラス増の12クラス編成となりました。母校の生徒数は一四八三名（男子九八九、女子四九四）の大所帯になりました。現在中学二年の生徒数がピークだそうです。それまでまだまだ10クラス以上の新入生が見込まれます。仲間が多ければ又楽しの気持で学校生活を送っています。

○校舎一部改造される。

新入生増に伴い、北校舎一階にあった社会科教室、同準備室、美術教室及び同準備室があったところが一年生用の普通教室（四教室）に改造されました。社会科教室、美術教室はそれぞれ東校舎一階、三階に移されました。母校も少しづつ変貌しています。

大会報告

県総合体育大会（上位入賞）

①団体、3位サッカー、3位剣道男子（北信越大会決勝リーグ進出）、3位バドミントン男子（北信越大会出場）、2位ボート男子（北信越大会出場）、1位フェンシング（北信越大会出場）、1位テニス（北信越大会出場）

②個人、陸上800m5位古俣勇人北信越3位、110H2位兼田拓弥・北信越2位、走巾1位志田哲也・北信越2位、ボートシングルスカル1位高野昌則・北信越出場、ボクシング1位加藤雄介・北信越出場

以上の結果インターハイ出場は県総体各1位と陸上競技北信越入賞者であります。

速の写真コピーを見て、また反芻していました。女性共もよく来たもの。北村君と同乗して帰宅、また雑文書です。御礼まで。

「夢遠青陵螢雪場」六月十六日

大橋信夫先生と温泉旅行

60回　坂井丈夫

四月二日に富山和夫君の発案で六十回有志七名は、昭和二二年から二七年まで新潟中学—高校で国漢や社会を教えていただいた大橋信夫先生をお誘いして、湯河原へ一泊旅行を行なった。

先生は昭和二七年三月、担任の三年G組を卒業させたあと、東京都の高校教員に転ぜられ、同時に東京大学大学院に御入学になった。

現在は、既に都を定年退職、二度目のお勤めとして埼玉県所沢市の高校で教鞭をとっていらっしゃる。

昔ばなしを中心に談論風発、深更まで歓談し、楽しくも懐しい一夕であった。先生も普段接する十代のギラギラしたツッパリ連中よりは、今は蓑えた昔のツッパリ野郎どもを相手のやりとりの方が愉快であられたようである。

先生は、東大文学部を繰り上げ卒業で学徒出陣、終戦時は、海軍少尉で海軍軍令部に御出仕であった。復員後教職に就かれたのである。

闊達で良き兄貴のおもむきがあり生徒から親しまれた。

綽名のキリンは長身で颯奏とした姿をよく現わしている。排球部の顧問をなさった。

授業は、万年ノートの棒読みや慢談などではなく、いつも多角的な追求、立体的な分析を重んじ、生徒に常にそのように研究する必要性を強調された。

私事だが、中大法学部入試のとき例の核下之嘆の一節が自文で示され、訓釈を求める設問があった。

騅不逝兮可奈何について、一応「騅行かず如何にすべきか」と読まれているとしたうえで「騅の行かざるは如何ともす可し」と訓ずるべきであるとし、用字、詩意について論じた。

余裕か、余分か、いずれにしろ麒麟の壁は完うしたのである。

昭和三十八年卒業 25周年記念同期会

71回生

—6月11・12日湯沢温泉—

前回同期会で、次回は湯沢でなどとものの弾みで決議されたのが事の始め。時の経過をうらめしく思いつつ準備を進め、迎えた当日の六月一一日、三八〇人中九九人、立派な出席率でありました。名称「さんぱち会」の幕明けです。二五年振りに相まみえる者も多く、懐しさで人の輪が随所で広がり、話の花が咲き誇っている様は実に嬉しい光景でした。昼に実施のゴルフコンペの表彰、最も遠来の参加者板垣邦明君の乾盃の音頭、当時の担当、化学の小田さんの久方振りのお話、何年経ってもマドンナのままの十四人の女性参加者etc。本当に楽しい集いでありました。

一夜明け、部屋で飲んだ酒量に驚き、その精算で真顔に戻ったA君B君お元気で。一・一二両日ゴルフを連続で頑張ったC君D君、財布の方は大丈夫かな。湯沢東映ホテルさん、四四歳の「坊や達」の童心に戻っての騒ぎ振りご容赦頂き有難う。気も使いましたが、金も使いました。でも、こういう使い方は何とも言えず楽しいものでもあります。五年後（三十周年）の再会をより楽しい会にと願う幹事一同です。皆さんお元気でありがとう。（71回・中村）

※追伸　当日岩室温泉で第六一回の同期会が同時に開催されましたので、電報によるエール交換も併せて実施いたしました。

青山同窓会 鈴木杯コンペ

鈴木会長より寄贈のカップを競うゴルフコンペが、天候に恵まれた六月二二日、紫雲ゴルフクラブで行われた。

今回から、従来のダブルペリアをやめて、申告ハンデによるストロークプレーとなった。公正を期す意味で五アンダー以上の優勝は除外し、準優勝にするとのルールであったが、六三回滝沢正元氏は最終ホールでも調整せずにがんばり六アンダーとなり、おしくも優勝を逸した。

優勝は奇しくも同ハンデ(11)同学年六四回の忠昭男氏、笠原円晃氏の争いとなったが、午前中のスコアのよい忠昭男氏の優勝と決まった。

次回秋の大会は九月七日サンライズゴルフ場で行われます。同好多数の参加を期待しております。

同期生誘い合わせて申し込まれれば、同じ組にて廻ることも可能です。詳細問い合わせは、母校事務局二六六—二一三一又はゴルフ会幹事石田二八三—二一五一（オリオン印刷）まで。

お願い 六十七回の諸君へ

六十七回卒（昭和三十四年卒）は来年卒業三十周年を迎えるので、同期会を行う予定で現在新潟側幹事で計画中です。

働きざかり熟年の同期生は今企業戦線の第一線で、全国に活躍中で、その住居も、転々定かならぬ者多いので、同期会開催の度に、名簿づくり案内発送、その他で幹事は大変苦労しております。この会報をご覧の六七回の諸君は、同期生の消息・住所等について、知り得る限りの情報を新潟での同期会幹事・石田瑞穂（〒九五〇新潟市南島来島一ノ十九ノ一オリオン印刷、電〇二五—二八三—二一五一）へご連絡下さい。

画人笠原軙とその父漁村 (十三)

60回 小林智明

同窓会のみなもと

美術学校在学中の軙が、どのような学生生活を送ったものか具体的な資料に乏しいのは残念であるが、三年生の時に母校新潟中学校の『遊方会雑誌』に寄せた「故園の画趣」という文の中には、故郷新潟を深く愛し、晩年その新潟の絵を画き続けて一生を終えた彼の芸術家としての眼や心をすでに感じとることができる。画人笠原軙を育くんだ土壌であるその新潟の地を、彼自身どのような眼でとらえていたのか、重要なルーツであるので再録してみたいが、長文なので抄出すると

「新潟を取巻いて居る自然の風光を、俗趣だといひ平凡だといふ人は語るに足らぬ、……新潟の近郊を逍遥して画趣を見出し得ない人は未だ絵心の欠乏して居る人といはねばならん、郷を出でて早や三年の春秋を、われは都ながら上野の奥の画堂に暮しつ、画堂を繞る森影をホンテヌブロオのそれにもなぞらへて、西の国の天才の悌に憧がれ、パレットの乾く間なく寂味の色を重ねて居る、光うららかな朝の窓折には懐かしい故園を思ひ出す、……。

世の心なき人達が、画師の生涯をただ道楽なる浮世渡の如く思惟するものには、和蘭十七世紀の風景画家が、如何に自然に憧がれ時流に抗して悲惨なる最後を遂げしかを語りたい。今の世に円満なる成功を斯界に獲んには、健全なる身体、富有なる財産、繋累なき境遇と、天才とを兼備せざる可からず、ただ絵師となりて安穏なる生涯を終へんとするならば、平凡なる境遇に満足せねばならぬ、ミレが言った語がある『擲り合ひの世の中だ、勝ったものが成功する、平和は絵かきに大毒だ』、真の絵師とならう、擲り合もよい、咬合もよい、絶大の快楽を獲んには絶大の苦痛をふまねばならぬ、併し世はウイッスラーの技本主義のみでも通らぬかも知れん、食はずして絵はかけぬ、製作をなし得ることさへ出来たら以て満足してゐねばならぬ、静かに修養する、真に絵画を楽まうといふ人にはこれ以外に何等の欲望も要らぬことであらう。

斯く思ひ去り思ひ来りて瞑想すれば美しき故園の自然は更に続物の如くに現れて来る、白山の堤、河口の磯辺、青山の松原、寄居の浜、またはやや遠く平島、沼垂の畑続き、自然の愛に充ち満ちたる幾多絶好の画境を彷彿して、何時か楽しく心ゆくばかり筆をとるの快を偲ばせる。

くり返しわれは新潟の自然を讃賞す、……然し時勢は急転して行く、物質主義の要求は非常なる勢を以て自然を破壊して行く、新潟が遂にこの惨害を受くるに至っても、決して佐渡が島根は朝夕を桃色に染めて七彩の波は緩かに揺れることをやめはしまい、伊夜彦の峰は河上の水を紫にする朝毎に、其の山頂に沿うてピラミットの如き火の輪廓を輝かすことをやめないだろう、自然のこの偉力は遂に如何なる魔力を以ても敵することは出来ぬ。

新潟に生れ、新潟に長じ、朝夕を其自然に親炙し来りし人や吾れは、新潟の自然に感化されたことの偉大なるを信ず、洋々たる大海、峨々たる山岳は、偉大なる人物を産すと聞く、人が新潟を以て男子の地に非らずと呼ぶは、一つに皮想の見を以てして、山海の雄偉峻絶ならざるを慊らずとなすものならん、さは言へ一代の毀誉褒貶はきくに足らず、夏の夕磯に踞して変りゆく彩雲の美しきを瞻るとき『世に調色の名手は多く海浜の地より産す』と、西欧の画人の言を思ひ出す、そして岸に回転する白波の響が絶えず『大画人出でよ』と嘯いてるかの様に聞えて居る。」

この文からはその晩年に、誰よりも新潟情緒豊かな絵をたくさん画き遺した屠龍山人笠原軙の沸々たる郷土愛を感ぜずにはおられない。昭和の今でも充分に共感を覚えるものがある。

一方時局は、国家の存亡にかかわる日露戦争という重態となり、国を挙げて未曾有の国難に対処して行かなければならなくなった。戦局は多大の損害を出しながらも、開戦の翌三十八年一月にロシアの南満州の拠点であり、堅塁を誇る旅順を攻略、三月には奉天の大会戦に勝利、更に五月にはバルチック艦隊を日本海に迎い撃ってこれを壊滅させ、七月には樺太を占領した。そして遂に九月、アメリカのポーツマスに於て講和条約が成立、一年半にわたる日露戦争は終結した。奉天大会戦では、その作戦に六回生の建川中尉が建川斥候隊長として大活躍。山中峰太郎により「敵中横断三百里」の題名で小説化され、日露戦史にその名を残す壮挙をあげた。しかし木村立雲先生以下同窓合せて十四名が旅順、黒溝台、奉天などの激戦地で若い生命を散らしてしまった。

白山偕楽館　笠原　軙
(朝妻鐵男氏蔵)

戦争の余燼が消えやらぬこの年の十月五日、新潟では大変な事件が起きてしまった。有名なボートレース事件である。この事件は余りにも有名であり、多くの先輩により語られているので、今更ここに余計なことを記すのは控えるが、レースの判定をめぐって騒ぎが持ち上り、優勝旗は奪われて行方不明、更に新潟中学校生徒が大挙して新潟商業へ殴り込み、流血の惨事にまで発展した。新聞は連日報道し、市中が一ケ月余にわたって大騒ぎとなった事件であった。商業と僅差の勝負を争った問題のボートには田辺正一（十三回、安田村保臣）舵手をはじめ七人の選手が乗り組んでいたが、その中に美校後輩として軙の後を追って来た鈴木良次が四番を漕いでいた。この事件により多田校長は引責辞任。新潟中学校は七代長沢市蔵校長の時代へと移った。

軙は美校一年生の時に、母校の遊方会雑誌の裏表紙に水軍小屋の絵を送ったり、二年生の時には立雲会が起り、三年生になっては「故園の画趣」を投稿するという工合に、なにかと母校新潟中学校は彼の生活から切りはなせぬものであったし、夏休には毎年帰省して、スケッチをしたり親しい級友と飲んで旧交を温め合ったりした。

その三年生の夏休み、即ち明治三十九年の八月四日に、新潟中学校出身者同窓会第一回大会というものが白山公園内の偕楽館で開催された。この日午後二時、発起人会津友一（古町、只一の兄）が先ず開会の辞をのべ、議長となって直ちに議事に入り、会則を議定、次に長沢壺蔵校長の演説、更に同窓先輩英語の小黒太白先生の演説があり、終ると角力や手品の余興と続き、いよいよ会食となった。宴たけなわの頃、一天俄かにかきくもり、折からの大驟雨があったというあたりは、現在の総会でも時々見られる季節の風物である。その頃にはあちこちに気焔を上げるものが相次ぐ盛会となり、午後七時にようやく散会したというからその様子がしのばれる。その日は七名の幹事が会則に基ずき互選され、軙もその一人に選ばれた。まず在新潟からは母校の小川廉三郎（歴史教諭）、それに前記の会津友一、玉林圓誓（西堀二）の三人、在東京から町田勝治（十回、東堀七、新潟県属）、相馬閏次（十一回、五十公野、東京工大）、小山九市（十回、古町五、東京高商）と渡辺軙の四人であった。会の事務所は新潟中学校内に置き、毎年八月第一日曜に開会することが定められた。（つづく）

ラグビー部創立四十周年記念式典挙行

記念事業と行事
一、青山ラグビー祭
二、四十周年記念誌の編纂
三、部歌の制定
四、記念試合　於新潟高校
五、記念式典　於ホテル新潟
講演　大西鉄之祐氏
（元早大監督）
写真展
祝賀会

青山ラグビー祭は六二年夏に現役・OBの試合とバーベキューパーティで、以来毎年実施されることとなった。

記念式典は六三年五月二二日、先ず記念試合は正午より超OB、OB、現役OBの三戦が小雨の中で熱闘を展開した。

次いで講演会。〝W杯ラグビーを見て我国のラグビーを考える〟の演題で「NZのW杯征覇は組織的ラグビーの強さを証明した。日本は持ち前の器用さとダッシュ力、持久力を生かした戦法を徹底すべし」と説かれ、展開・接近・連続の大西ラグビー理論を示された。また「高校生はチームの戦術に基づき、そのポジションに必要な技術を集中的に学べ」と部員を激励された。約三〇〇人の聴衆は大西話術に酔った。

祝賀会は来賓二〇名、現役五五名、OB及び家族一二〇名の参加を得て盛大に挙行された。来賓紹介、沿革紹介の中に豪華な料理にかこまれて創部以来の写真展と記念誌を通して旧懐の一刻が過ぎた。

最後に部歌の歌唱指導で全員の大合唱で幕を閉じた。

昭和二二年の創部当時のOBをはじめ、旧友との試合や語らいはラグビーライフの楽しさを弥益すイヴェントであった。

この四〇周年も六〇年・六一年の二年連続花園出場があったればこそ実現できたもので、参加者一同今度こそは花園で一勝の決意を固めたのである。（部長59回　関根彰圓）

試合の流れ

硬式庭球部部長3年　田中貴紀

硬式庭球部は男子団体で、県大会初優勝し、インターハイ出場を決めました。その決勝戦の模様の一部を部長から書いてもらいました。写真はその団体戦のメンバーです。

インターハイ予選の団体戦決勝、自分は1勝1敗で迎えた第三試合目のコートの上に立っていた。5—4のリードで迎えた第九ゲーム目、追い上げられるかもしれない、早く決めたいというあせりから、それまでは七本八本と返球し相手を振り回してからエースを取っていたのを最初から無理に強打してしまい結局はそれが全部ミスにつながった。そしてそのままずるずると6—5まで逆転されてしまった。5—3の場面では、自分はどのようにポイントを取っていたかを客観的に見ることと同時に試合の流れを客観的に見ることができなくなっていた。それが逆転されてやっと頭を切りかえることができた。勝っていても負けていても自分のできる最高のプレーをするしかないんだということに気付いた。もし自分が最高のプレーをし、それで負けたら、それは相手が強かったんだと。今一番大切なのは自分がどのようにプレーしているのか覚えていること、全力を尽くしていること、そのことなのだと。

試合の結果は7—6で勝つことができた。この試合で、テニスを始めてからの夢であったインターハイ出場が現実のものとなったのである。しかも三年間いっしょに練習してきたみんなと出場できるのである。この勝利の喜びを忘れずに、インターハイでも必ず勝ちたいと思います。

編集後記

★今号では、母校で行われた小平先生の講演会にいろいろお骨折りいただいた志賀浩二先生より、コメントをいただきました。その浩二先生の思い出を事務局の岩田さんに書いていただきました。

★旧職員の阿部先生にも長文の思い出を寄せていただきました。名物先生、いつまでもお元気で何よりです。

★若い卒業生の沢登さんから、志をたて、念願の留学を果たすまでの体験を、後輩への便りとして書いていただきました。原文はもっと長文なのですが、紙面の都合で、編集部でカットさせていただきました。おわび申し上げます。

★今号は記念同期会の記事が多く、大勢の写真が多いので、出来るだけ大きく扱いました。今後ともこの方がよいのでしょうか。

昭和62年度　青山同窓会費納入者追加分

（1月より3月までに納入のもの）

（納入先　郵便振替口座　新潟5-4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　0275210青山同窓会）

会費納入のお願い
年会費1口1,000円
できるだけ1人2口以上でお願いします。
現金納入は　新年会・総会の会場
又は母校同窓会事務局へ

期	氏名
18	治
29	郎
31	繁
	玉
	木
	石
	村
32	鎗
33	春
	永
34	樋
35	佐
36	中
37	田
	田
38	皆
	小
	丸
	藤
39	真

期	氏名
41	雄
42	恒
	倉
	篠
	佐
	飯
43	塚
	草
44	菊
	遠
	鈴
	田
45	藤
	小
	佐
	河
	長
46	石
47	杉
	小
	中
	古

期	氏名
48	駒
59	林
	上
	熊
	中
51	厚
	唐
	真
	村
52	押
	乙
53	小
	坂
	篠
	桜
	関
	橋
	藤
	野
55	宮
	福
	武

期	氏名
55	橋
	大
	阿
	久
	網
	伊
	佐
	大
	高
	安
	大
	奥
	神
	斉
	吉
	種
56	高
	今
	河
	小
	田
58	木
59	尻
	保
	干
	藤
	藤
	橋
	倍
	田
	村
	井
	原
	根
	沢
	瀬
	田
	原
	藤
60	橋
	井
	田
	林
	部

期	氏名
	雄
	定
	威
	剛
	道
	泰
	淳
	勝
	洋
	邦
	繁
	悌
	陽
	岡
	剛
	一
	鉄
	賢
	幸
61	高
	高
	長
	水
	山
	渡
	阿
	大
	小
	佐
	菅
	三
	長
	古
	長
	村
	佐
	田
	中
	中
	児
62	雄
	一
	雄
	雄
	一
	夫
63	之
	雄
	夫
	雄
	男
	二
	郎
	一
	司
	武
	明
	敬
	明
	文
	峰
	俶
	彦
	博
	吉
	一
	司

期	氏名
63	介
	章
	俊
	市
	郎
	実
	之
	司
	明
	正
	夫
	夫
	雄
	美
	皓
	英
	行
	博
	平
	男
	治
	輔
64	高
	真
	近
	椎
	立
	土
	西
65	伊
	小
	小
	河
	近
	笠
	渋
	須
	根
	南
	難
	鉾
	山

期	氏名
66	小
	小
	寺
	丸
	山
	阿
	川
	中
	小
	石
	大
	岡
	加
	笠
	風
	志
	小
	花
	藤
	成
	西
67	川
	畑
	島
	岡
	崎
	部
	崎
	野
	林
	井
	塚
	田
	藤
	原
	間
	林
	輪
	藤
	海
	野
69	宏
	志
	津
	邦
	央
	稔
	智
	彦
	仁
	勲
	二
	療
	哲
	利
	邦
	大
	秋
	安
	泰
	治
	誠
	男
	三
	哲
	隆
70	勝
	誠
	ツ
	郎
	介
	司
	太
	昭
	之
	嶺
	弘
	郎
	二
	之
	夫
	康
	之
	子
	聖
	通信制
	69名
71	増
	村
	山
	山
	渡
	大
	中
	小
	丹
	中
	志
	関
	坂
	鈴
	曽
	本
	阿
72	田
	山
	口
	宮
	辺
	西
	島
	林
	羽
	冨
	田
	憲
	一
	啓
	隆
	隆
	義
	義
	聖
73	常
74	正
	正
	昭
	之
	嶺
	弘
	郎
	二
	之
	夫
	康
	之
	子
	聖
75	井
78	木
79	根
	間
	代
	保
	本
	阿
82	田
86	山
	口
	宮
	辺
	西
	島
	林
	羽
	冨
	田
	憲
	一
	啓
	隆
	隆
	義
	義
	聖